

ひなまつり

雛の家 二木屋



左上) 今年寄贈されたばかりの雛人形。状態もよく可愛らしい丸顔に癒される
 右上) 階段にずらりと並べられた人形
 左下) 移築された雛れの広間には、時代も地域も異なる人形がずらりと並ぶ「毎年、スタッフが試行錯誤して飾っています」(森田社長)

2月と3月の2カ月間、特別会席料理を提供。見た目も味も堪能できる

間近で楽しむひな人形

国登録有形文化財の二木屋は、平成10年10月にオープンした食事処だ。石垣に囲まれた古い屋敷の敷地は約400坪。40畳の客間からは敷地内の中央に位置する日本庭園を眺めることができる。建物の主は鳩山一郎内閣(1955年)で厚生大臣を務めた小林英三氏。川口で鋳物業を営み、発明家・実業家としても活躍していた。

二木屋は英三氏の孫である小林玖仁男氏が開業した。ここにある1000点以上のひな人形はすべて玖仁男氏が集めたもので、「ひなまつり」ではそのコレクションを見ることが出来る。毎年1月半ばから三月末までの二カ月間開催され、江戸、明治期のひな人形や雛道具、郷土玩具など、さまざまな人形が一堂に会する。

同店の森田まり子代表取締役は、春の恒例となったイベントをこう話す。「毎年異なる人形を、異なる場所に飾っています。もともと女の子の遊び道具だったひな人形。お客様には身近な存在として感じていただきたいし、お雛様仕立ての会席料理を楽しみながら愛でていただきたい」(森田社長)。

2019年に玖仁男氏が逝去し

た後も、各種人形の引き取り依頼が全国から寄せられる。今年も、京都の老舗・大木人形店の五代大木平蔵氏作の人形が寄贈された。「丸顔が可愛らしく人気がある」と森田社長は目を細める。

来月はこどもの日に合わせて、五月人形が展示される予定。また7月の七夕には日本庭園にろうそくを敷き詰め、幻想的な空間を演出。そこで能が披露される。

「感染症の影響で非常に厳しい状況。それでも続けることに意義があると思う」と話す森田社長。二木屋の取り組みは、今後も盛り上がりを見せる。



雛の家 二木屋

住所 〒338-0012
 埼玉県さいたま市中央区大戸4-14-2
 電話 048-825-4777
 アクセス JR北浦和駅から徒歩約10分

ひな祭り展

青梅 津雲邸



七澤屋の雑道具（江戸時代後期）



津雲家の有職雛。江戸後期から末期の小直衣雛



雛屋次郎佐衛門の立雛。袴に菊紋が押されていて天皇家からの頂き物とされている



狩衣姿の稚児雛。江戸後期から末期の製作と言われる



明月院（あじさい寺）に伝来した桜紋螺鈿の明月碗

江戸、明治期のひな人形

東京都青梅市にある津雲邸は、元衆議院議員であった津雲國利氏が昭和6（1931）年から4年の歳月をかけて造った入母屋造りの建物で、現在は歴史資料館として使われている。屋久杉、タガヤサン、柚などの多彩な木材が使われた建物は隅々まで職人の技が生かされていて、昭和初期の流行であった和洋折衷の名建築と評されている。昨年（2020）に国の登録有形文化財となった。

津雲國利氏は昭和3（1928）年から22年間にわたり衆議院議員であった。館長の津雲薫氏は國利氏の孫にあたる。津雲館長によると、津雲邸は政界や著名人をもてなす場所として利用していたそうで、青梅に住居があった川合玉堂や吉川英治なども訪れたそうだ。津雲邸が歴史資料館として公開したのは6年前。年に数回ほど企画展を開催しており、ひな人形、鎧兜、屏風、工芸品、江戸から明治の歴史資料などが展示される。3月28日（日）まで開催されたひな祭り展では、江戸後期から明治につくられた人形、雑道具が飾られた。江戸後期の有職雛、立雛、稚児雛のほか、一式揃えると所帯を持つ

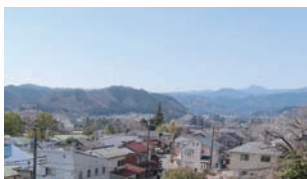
るほど高価だったといわれる上野・七澤屋製の雑道具のほか、天皇家ゆかりの初参人形もあり、貴重な見応えある作品で埋め尽くされていた。

「歴史的に価値のあるものを眼の前で見たい、見たい、見たい、青梅の街歩きも楽しんでいた、見たいので今後も展示していきたい」（津雲館長）。

次回は5月初旬から「和のしつらえ」がスタートする予定。

ここでしか見ることができない貴重な作品が展示される。

津雲國利氏が愛した青梅奥多摩の風景とともに、美術工芸と歴史を楽しんでいただきたい。



青梅 津雲邸

住所 〒198-0084

東京都青梅市住江町72-2

電話 0428-27-1260

アクセス JR青梅駅から徒歩約6分